

# 政治社会にみる「ガリビリテイ軽信性」

齊 藤 寿

一、はしがき

二、政治社会にみる「軽信性」の概観

三、政治社会にみる「軽信性」の実状

四、「軽信性」の病理

五、「軽信性」の分析

六、政治社会にみる「軽信性」の克服

七、むすび

## 一、はしがき

イギリスの政治学者エドワード・ハレット・カー (Edward Hallett Carr) は Macmillan から出版した “The New Society” (新しい社会) の著書で、「私たちは、『新社会』の入口に立っている。人類が亡びないようにするた  
めには、思い切ってこの入口から門を通して入ろう、」と呼びかけながら、「今や、『理性』そのものが『理性』をそ

の王座から引き下ろす役割を演ずることになり、社会心理学者が合理的研究方法を用いて発見したところによると、大衆を効果的に動かすのは、讚美や嫉妬や憎悪のような非合理的な感情であって、そのためには、合理的議論よりも眼や耳に感情的に訴えるか、あるいは単純な反覆が最も有効である。

広告が大量生産に欠くことのできない機能であるように、宣伝は、大衆民主主義にとって欠くことのできない機能である。」と述べ、更に論述をつづけて、「政治的オルガナイザーは、商業広告業者をまねて、売薬や冷蔵庫を売りつけるのと同じ方法で、その幹部や候補者を選挙民に売りつける、——この場合は、もはや、国民の「理性」に訴えるのではなく、国民のガリ・ビリ・テイ（軽信性）に訴えるのである。」と述べている。<sup>(二)</sup>

大衆民主主義の現代政治社会のもとにあつて、こうした「軽信性」に訴える訴え方は、ますます激しくなりつつある。

しかるに、今日まで、こうした『政治社会にみる軽信性』については、二・三の極めて少数の政治学者によって、部分的にしか論じられておらず、この種の詳論文は、皆無にちかい。

そこで、私は、あえて本論題を提出し、テーマの本質について、科学的に分析、論述せんとするものである。

## 二、政治社会にみる「軽信性」の概観

想うに、「軽信性」(Gullibility)といった政治学上の概念提起は、本論文においてはじめてであろう。

本論文でとりあげる“Gullibility”とは、合理的・理性的判断によることなく、非合理的な要素の政治的働きかけに

よる「だまされやすさ」のことである。

もとより、こうした「だまされやすさ」——軽信性 (Gullibility)——は、政治社会構成員の「感情的要素」、「伝統的要素」等によって、「のろまさ」や「だまされやすさ」をうむものである。

感情的要素の例として、超凡の才能をもって活躍し、デカルトとともに近世哲学の祖としての業績を残したフランシス・ベーコン (Francis Bacon) は、「生活と道徳に関する忠言」なる副題をもったエッセイで、次のように論じている。

「快適にして感覚に訴える礼祭儀式、過度なる外面的偽善的な敬虔、主僧等が自からの野心と利慾のためにする戦術、蒙昧な時世 (特に災害事変を伴ったとき)、その他は、迷信 (だまされやすさ) の原因となっている。」<sup>(1)</sup>と。

また、マックス・ヴェーバー (Max Weber) は、神秘性に着眼して、いわゆる「神秘的指導者」は、全体意志を表現するものとして現われて来た<sup>(2)</sup>とし、新しい大衆社会の中で道に迷い当惑している平凡な個人の特質や願望を回復し、体現する一個の指導者を高い地位へ押しあげるとみているのである。

更に、マックス・ヴェーバーは、政治社会等にみる人間行動には、「合理的行動」と「非合理的行動」があるとし、前者には、「目的合理的行動」と「価値合理的行動」がみられるのに対し、後者には、「感情的非合理的行動」と「伝統的非合理的行動」があると指摘しているが、このような観点に立った場合、前者は「理性」による行動であるのに対し、後者こそは、本論文のテーマである「軽信性」による行動のカテゴリに入るといえるわけである。

例えば、感情的 (情緒的) 非合理的行動によって「軽信性」をひきおこす場合は、今日の指導者の主要な姿にみる

ことができるのである。

すなわち、今日の指導者の主要な姿は、もはや政治問題や経済問題について正しい判断を合理的に下す能力にあるのではなく、また、自分の代りに正しい合理的判断を下す最良の専門家を使う能力にさえあるのではなく、「笑顔で公衆に臨むとか、人々を納得させる声で（例えば対話調で）話しかけるとか、親しみのある調子で、ラジオの炉辺談話をやるとか、テレビ談話をやるとかして、人々の「軽信性」に訴えることが肝腎になってきている」とさえみえるのである。

しかもこうした傾向は、今日の指導者が自からそのような技術を身につけるとどまらず、そのような指導者の「宣伝係」の手で、巧みに作りあげられるのである。<sup>(四)</sup>

また、前述のフランシス・ベーコンが指摘している例のように、計画的過度の「称讃」に訴えるような場合もある。F・ベーコンは、「称讃は美徳の反映である。しかし、その反映は、それを生ずる鏡、または物体の如何によっていろいろとなる。」と述べ、称讃が、凡俗や計画的企図から来る場合は大てい謬っており、無価値なものである旨を警告している。

更に加えて彼は、「世には非常に多くの虚偽の称讃があるから、人はこれに対して警戒的態度をとるべきである。」<sup>(五)</sup>と指摘して、「理性的判断」をくだすよう忠告し、「軽信性」をいましめている。

一方、視点を変えて、「軽信性」について考察するに、諸型の政治学理論にみる「軽信性」の性向が、問題となる。政治学の学問的性格を問題とした最初のものとしては、「倫理的政治学」(E)と「力学的政治学」(D)とであっ

て、前者は、「政治は道德の実践である」という立場であり、後者は、「政治は力なり」という見解であつて、それぞ  
 れの立場から政治を理論づけようとするものである。<sup>(六)</sup>

そこで、前者をE、後者をDと記号化すると、今日の政治学の現状は、

$$E \wedge D$$

となつており、「力学的政治学」優越 (Supremacy of D) の政治学である。

こうした現状から考えると、現代政治社会は、「軽信性」をダイナミックに操縦する操縦手が、烈しく蠢動しやす  
 い土壌となつているのである。

すなわち、「<sup>ガリビリタイ</sup>軽信性」をG、「<sup>リーズン</sup>理性」をRと記号化すると、DはGをおびきだす性向を有し、RをひきだすにはEと  
 むすびつくことが要求されざるを得ないといった性向を有するのである。

これを図式化すると、

$$\begin{array}{ccc} R & \cdots & E \\ \wedge & & \wedge \\ G & \cdots & D \end{array}$$

となり、現代政治社会の現状は、「軽信性」先行の密度が濃く、「R ∧ G の政治」の様相を呈しているといえるので  
 ある。

### 三、政治社会にみる「軽信性」の実状

そこで、こうした「軽信性」についてその実状を知るために、日本の政治社会に焦点を合せて考察してみよう。

わが国の政治社会にみる諸々の政治現象に対する、政治社会構成員のイメージは、本物をリアルに把握する能力を大部分のものが失ないつつあるということである。

すなわち、「本物」と「イメージ」の間隔が遠くへだたり、「本物」が本物として把握されず、「化けもの<sup>(七)</sup>」として把握され、無数の化けものがひとり歩きをしているのであって、私が「イメージの化石化現象」と呼んでいる現象が、盛んに現われはじめたということである。

そして、こうした現象が、実は「軽信性」の実体的表現なのである。

それでは、こうした「軽信性」を支えるわが国の政治風土の実体とは何んであろうか。

それは、わが国の政治風土が「並列型」を呈しているということである。

すなわち、「並列型」とは、線香箱の中の線香のように、各々バラバラに並列しているにすぎず、各々の間になんらかの共通分母を欠いているということである。

こうした現象に比し、欧米先進国の政治風土は、「扇状型」を呈し、政治現象の各々になんらかの共通分母である「要<sup>かなめ</sup>」(ハンド) (『軽信性をもたらさぬための政治教育のいろいろな場など』を有しているのである)。

すなわち、「扇状型」とは、「ハンド・アンド・ヒンガー・タイプ」(または、「熊手型」か「ホーキ型」)というこ

とで、「要」をもとにしてその先の方がいく本もの指にわかれてゐる——扇のような——政治風土を示しているといえるのである。

このような現象について、丸山真男教授は、前者を「タコツポ型」、後者を「ササラ型」として考察しているわけであるが、いずれにしても、こうしたわが国の「並列型」政治風土は、「軽信性」を培養する土壌となりやすいといえる。

こうした「軽信性」の実状を更にリアルに示しているものに、わが国の政治社会では、「インズ（内輪）とアウト（よそ）の峻別現象」がある。

わが国の政治社会の各集団は、そのメンバーをまるがかえにする結果、いわば組織の内と外を峻別し、インズ（内輪）はインズ（内輪）で「並列化」するのみで、「扇状化」して一つの「要」に結びつかず、インズ（内輪）のいうことは、無条件、無批判に信じ、反対にアウト（よそ）のいうことは、なかなか信じない。

こうした性向に「軽信性」は定着しやすいことはいうまでもない。

すなわち、「ウチ」という場（枠）では、簡単に「軽信性」に落ち入りやすいということである。

わが国の社会では、今だに「質」（広義の資格）よりも、「場」（枠）が尊重され、運転手とか、事務員とか、旋盤工とか、政治家とか、教授とかいった要素（機能価値）より、A新聞社に勤務している（運転手）とか、P政党に勤務している（事務員）とか、X会社に勤務している（旋盤工）とか、Y政党に所属している（政治家）とか、T大学に勤務している（教授）とか、いった具合に、括弧内の「機能価値」（する価値）はあまり問題にせず、「属性（所属）

・価値」(である価値)(『社名や政党名や大学名』を大いに問題にする。

こうした社会では、A新聞社とか、Y政党とか、T大学とかに属している(勤務している)という点にのみ、価値評価の大部分の力点が集中し、その職場でいかなる役割を果たし、いかなる業績をあげているかはあまり論じられないのである。

したがって、このような日本人の集団意識は、『場』を強調する意識であって、きわめて、感情的な<sup>エモーションナル</sup>アプローチとなつてあらわれるのである。

ここでは、「ウチ」(ウチの者)と「オタク」(ヨソ者)の峻別がはつきりし、ウチの者は人間だが、ヨソ者は人間にあらずといった観念や、ウチの者同志では車中で席をゆずるが、ヨソ者の前では席はゆずらず、冷たい態度でぞむといったような現象を示すのである。<sup>(註)</sup>

こうした「ウチ」の強調は、「ウチ」は正義にかなない正当だとの無批判な価値評価をうみやすく、「ウチ意識」の発展は、ウチ↓イエ↓クミ↓部落↓何々一家(例―国鉄一家)↓政党の『派閥』↓官僚組織、といった発展過程を示している。

例えば、わが国のA党の党員の政党意識は、A党とは、a派閥、b派閥、c派閥、といった派閥の連合である意識しており、各々には、厳しい見えざる派閥の枠(場)が存在しているのである。

したがって、A党の党員であっても、党議決定後も、c派閥が反主流派で、党議決定に反対である場合、これに属している党員は、容易に党議のあり方の正当性を心底から信ぜず、あくまでc派閥のあり方を信じる性向をもつので



ある。

このような現象の結果は、A党内でも、党員全部になかなか「共通意識」がなく、したがって、同党内でも粋が存在するため、粋と粋との間の「共通用語」に欠けるのである。

そこで、a 派閥、b 派閥、c 派閥といった各粋間の「共通用語」(または基準用語 (key term)) をもっている「政治家者」の情報が、わが国の政治家の場合には、きわめて必要になってくるのである。<sup>(十二)</sup>

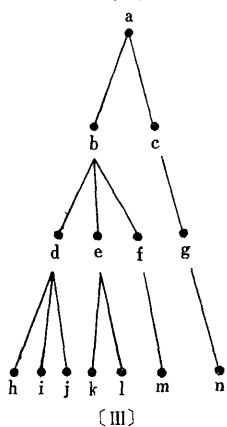
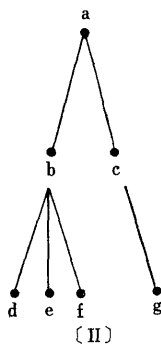
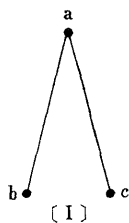
次に、「軽信性」の実状を、「官僚制」といった具体的政治社会に焦点をあてたアングルで、考察してみよう。

日本の「官僚制」のもとにあつては、欧米先進国の官僚制よりも、更に「軽信性」を生む土壌をもっているといえる。それは、わが国の官僚制のシステムが、「底辺のないタテ社会」になっているからである。

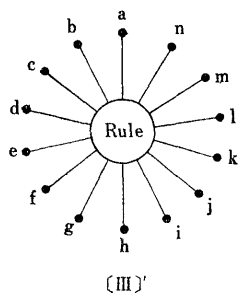
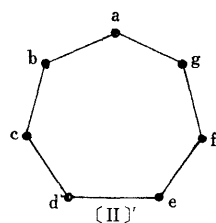
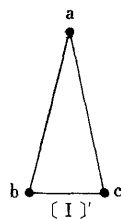
すなわち、「討議決定型」というよりは、「命令伝達型」を採用しているからである。

これらについて、図をもって示すと、次のようになる。

日本の官僚制  
〔命令伝達型〕  
—タテ組織(X)—



欧米先進国の官僚制  
〔討議決定型〕  
—ヨコ組織(Y)—



右の図の〔I〕〔II〕〔III〕といった順にマンモス化の過程をたどるわが国の「官僚制」の組織をみてわかることは、〔I〕において、bとcの同僚（同ポスト）を結ぶ底辺がないということである。

この現象は、〔II〕、〔III〕においても、無底辺のままエスカレータ的にマンモス機構化していくのである。

こうした組織のもとでは、〔I〕のbとc間にあっては、同ポストの官僚同士がお互いを信じ合うことはできず、b、c両者ともaの命令を無条件に絶対的に信じ、行政行動をとるのであり〔II〕、〔III〕においても、同様のことがいえるのである。

しかも、こうした現象に加えるに、X型の官僚制においては、例えば〔II〕においてみるように、他の条件にして等しいければ、bとcを比較した場合、明らかに、bの方が権力の座を高く占めて（<sup>十三</sup>defの三人の部下を有する）、部下の信頼を集めやすくなるのに反し、cは、gの部下を掌握するにとどまるといった性向を有する。

さらにこの型（X）においては、〔III〕においてみるように、aは、b、cを完全に掌握していればことたりるのであ

って、極端な場合は、d 以下 n までの人物を全然知っていなくても管理可能となっているのである。

こうした X 型においては、長所もあるが、Y 型に比し、きわめて非合理的な要素による人事管理はもとより、行政行為がなされる可能性が濃く、「軽信性」をもたらしやすいといえることができる。

こうしたことに反し、Y 型においては、あくまで討議決定型をとっているので、比較的合理的に管理するに至る結果をもたらす可能性を有するのである。

しかもこの型の場合は、Ⅲにみるように、ルール (Rule) を中心に組織化されているので、感情的非合的行政行為によることが少なく、合法性による合理性をもたらしやすいのである。

したがって、この型 (Y) においては、X 型より、軽信性に落ちいやすくないといった長所を有しているといえるのである。

次に、「政治組織の発展過程論」にみる二、三の「軽信性」の実状について述べよう。

その一例として指摘できるのは、日本の徳川時代の鎖国についての認識についてである。

この日本の鎖国は、マアカンチリズム、すなわち重商主義政策を反映しており、そのために、日本は、アジア諸地域のような植民地になることをまぬがれたのであって、鎖国には誤りばかりがあったのではなく、むしろ、こうした意味では、その効能は高く評価されねばならないのである。

しかるに、わが国では、「軽信性」の結果、必ずしもこうした点が高く評価はされていないのである。

当時わが国では、新井白石（一六五七～一七二五）が、「経国済民の術」として、重商主義政策を研究し、熊沢蕃

山、佐藤信淵、伊藤仁斎などの学問も、みな、国を富まし、国民の福祉を図るための政策学追求であって、これが江戸幕府二百年の鎖国政策を支えたものである。

今中次麿博士が指摘するように、多くの人々は、鎖国政策を日本近代の後進性をつくりだしたものととして、輕信し、惡評するけれども、日本の後進性は、もっと基本的な中世都市の發達の不充分性にあったのであり、貨幣蓄積が低く、資本の基礎を確立することができなかった点にあるのであって、鎖国のためではなかつたのである。<sup>(十四)</sup>

次に第二例として指摘できるのは、社会主義革命の条件として、「帝國主義高度化による独占資本主義」をあげる人が多いということである。

多くの人々は、右の条件のみを輕信しがちであるが、このような条件は、あくまで一般的客体的条件であって、主体的条件として更に必要な条件があるのである。

戦争による疲弊や半封建半植民地性もその一つである。<sup>(十五)</sup>

東欧の社会主義革命において、何が革命を可能にしたかといえば、封建遺制や植民地制の殘存による生産力の弱さによるのであり、生産力の停滯によるのであり、それによる生産關係に内包する矛盾の深刻さによるのである。

換言すれば、戦の打撃による、資本主義生産力發展のゆきづまりであり、生活物資の極度の欠乏によるのである。中国革命にもそのことが見いだされるし、生産力の強い国と弱い国との間に發生する社会矛盾に対する耐久力の相違は、政治社会構造の存立に決定的な影響を与えるのである。

したがって、生産力の不足という矛盾が發生したときに、それが生産方法の變革へ發展していくかどうかということ

は、その社会の現実的生産構造の強弱によって決まるのである。

帝国主義が、資本主義最後の段階であるというレーニン (Lenin) の提言は、ただ帝国主義の過程で起る革命が、社会主義革命であるというにすぎないのであって、決して革命の決定的過程を示すものではないのである。<sup>(十六)</sup>

したがって、帝国主義にまで到達していない段階で、社会主義革命が行なわれるのであって、東欧諸国の革命はその例なのである。

#### 四、「軽信性」の病理

以上考察してきたような「軽信性」の政治現象について、マックス・ウェーバー (Max Weber) は、「儒教とピウリタニズム」と題する論文で、「儒教は、『Heterodoxie』(異端)の色彩を残しているが、道教には原始的宗教的色彩が非常に強く残っており、こうした道教に結びつき、これに支えられているような精神的雰囲気とそれに見合うような社会状態のことを、『Zaubergarten』(魔法がかつている庭園)と呼んでいる」が、この『Zaubergarten』こそは、ガリビリティ (軽信性) の病理につながるものを持っているのである。

それは、グリム童話に出てくる魔法にかけられている庭園——魔法使いの女に魔法をかけられて、百年も眠ったままであるお城——に巢食う病で、迷信や呪術が支配し、人々がそういうものにとりつかれて生活しているような社会状態なのである。

「軽信性」が充満している政治社会の精神的雰囲気は、まさしくこういったもので、新興宗教につきものの万病を癒

す術とか、神がかりの予言とか、非合理的な呪術的なものがびっしりと網を張りめぐらしている社会状態を示している<sup>(十七)</sup>のである。

こうした世界が、『Zaubergarten』であり、この世界では、上層支配者層は、その効用を認めて、精霊に対して半信半疑うやうやしい身振りをしているが、下層大衆者層は、ひたすら「軽信性」に落ち入っているのである。

ところで、こうした「軽信性」の病理について、顕著な例として、『デマ』(Rumor)によってもたらされる場合に焦点を合せて、分析し、説明してみよう。

多くの人々が政治社会の中にあつて「軽信性」に落ち入りやすいのは、「戦時デマ」の場合<sup>(十八)</sup>であり、こうした非常時にはニュースが得られないので、国民には不正確なニュースが拡がりやすいのである。

この場合、多くの人々は、裏梯子を上つて来るゴシップを楽しもうとしたり、それによって衝撃を受けるのである。そして、彼等は、それを何かあやのある劇的なものとして伝え合い、これを受ける多くの人々は、これを無批判に受容するのである。

このような「デマによる軽信性」の診断については、「デマ」と「事実」の分析によって明らかにされている。

例えば、「ある少数集団（黒人とかユダヤ人とか）は、アメリカに忠誠でない。そして、暴動を企んでいる（または、政府をのっとうとしていたとか、兵役を忌避しているとか）」

と流布すると、このような偏見と背信に満ちた作りばなしの事実が、無批判な一般大衆のイメージとして、明らかに「デマ」に結びついてゆくのである。<sup>(十九)</sup>

それでは、デマによる軽信性の基本的な条件と法則は、どのような原則によって動き、病理として横たわるであろうか。

デマには、基本的な条件として、二つの条件がある。

すなわち、その第一は、デマは、話し手にとっても聞き手にとっても何らかの《重要さ》をもっていなければならないことであり、その第二は、その本当の事実が、何らかの《あいまいさ》によっておおいかくされていなければならないということである。

そして、この後者の《あいまいさ》は、ニュースがまったくないとき、不完全なとき、あるいは、ニュースが矛盾した性質をもち信頼しえないとき、更にはニュースがある種の緊張を起させて、それを信じがたくし、あるいは信じたくないようにさせるものであるときに生まれるのである。

次に、デマの基本法則であるが、デマの二つの本質的な条件としての《重要さ》と《あいまいさ》は、その伝わり方と、大体、量的に関係づけることができる。

すなわち、デマの強さに関する公式は、次のように書きあらわし得るであろう。

### $R \propto a$

右の公式の意味を言葉でいうと、デマの流布量は、当事者に対する問題の重要さと、その論題についての証拠のあいまいさとの積に比例するということである。

すなわち、《重要さ》と《あいまいさ》とは、加え合せるのではなく、かけ合せたものであるという法則が横たわ

るのである。

というのは、《重要さ》か《あいまいさ》か、どちらかの一方が零ならば、デマにはならないからである。<sup>(二十)</sup>

このような法則から私たちは、デマや軽信性を意識しているひとびとは、これらの犠牲になりにくい（零または零に近い）という原理を発見し得るのである。

次に、《繰り返し》と《強調》の結果からもたらされる軽信性についてであるが、合理的議論よりも、眼や耳に感情的な強調による訴えを繰り返すこと、とりわけ、単純な反覆を試みることが、軽信性をもたらしのにもっとも有効な手段であるといえる。

すなわち、人々は、《繰り返し》による指示を受けると、丸覚えという、もっとも安易な、もっとも機械的な方法で、受け渡しをすまそうとする。

こうした病理は、要約され、標語化されて来ると、そのまま覚え込むのがたやすくなり、丸覚えが試みられることを意味し、軽信性に訴えようとする人々は、スローガンを簡潔にし、要約し、リズムカルにし、思い出し易くしようとするのである。

また、《強調》は、言葉による強調、数の強調、動きの強調、などによってなされるが、“平均化”(leveling)と相関的な関係にあり、ある部分が落されるならば、残された部分は必然的に強調され、重要さを与えられ、ひいては軽信性をよびおこす結果となるのである。

そして、平均化と強調は、偶然に起るのではなく、本質的にはデマのひろめ手の過去の経験と現在の意識的態度



(強調しようという関心)にもとづいて起る、といえるのである。

## 五、「軽信性」の分析

これまで考察してきたような軽信性は、基本的には、政治社会の中にあつて、あるときには無駄なささやき合いを助け、またあるときには暴力のうねりを招いたりする。

そして、特殊なテーマの軽信性はめつたに消え去ることがなく、次々に、政治社会の歴史の舞台に登場する。しかも、その有用性がみとめられると、不死の伝説となつて結晶するのである。

例えば、古代ローマ帝国には、デマと軽信性の病菌がまんえんしていた。

デマの番人(デラトリスと呼ばれていた)が任命され、ひとびとの間を歩き廻つて、そこで聞いたものを宮殿にもち歸つて報告するという仕事が行われていたほどである。

その日に集められる話の数々は、人心をはかる恰好のバロメーターと考えられ、そして必要とあれば、デラトリスは、逆宣伝のためのデマをばらまくこともできたのであり、<sup>(三十二)</sup>これを受けてたつ多くの人々は、軽信性に落ちいつたのである。

また、平均化、強調、および同化が伝説で一番よくあらわれるのは、民族的な英雄の「史実」である。これを分析するに、アーサー王、フレデリック一世、ジャンヌ・ダークの事蹟については、伝説が史実を圧倒して、内容が物語風にまったく変えられてしまったほどである。

そしてまた、「民話の結晶化」にも、事実<sup>(二二)</sup>に反している（軽信性の）多くの例を見出しうるのである。

このことは、ステファンソン（Stephanson）が、『民話の結晶化』を、「誤りの標準化」と呼んでいることからも知<sup>(二三)</sup>りえるのであり、興味あるところである。

次に、軽信性をもたらず「デマの分類的」分析について、試みる必要<sup>(二四)</sup>がある。

デマの分類の第一は、時間<sup>(二五)</sup>的、基準<sup>(二六)</sup>によって分析するもので、ソビエトの社会学者ビソフ（一九二八年）によって採用された、①《這う、ようなデマ》がある。

この種のデマは、ゆっくりと発達し、ほとんどすべての人がそれを聞くまで、秘密のようにささやかれ、ひとびとの軽信性を刺激するもので、「何かの不幸を予言するカッサンドラのデマ」は、その典型である。

また、政治家や政府の高官や組合の指導者などの陰謀についてのデマも、この例である。

反対陣営から流されるこの種のデマは、敵意にみちており、その伝え手は、無限の連鎖をなして、次第にそれを拡げて行くのである。

①について、②のデマは、『急性のデマ』で、それは、さし迫った危険や間近の希望に関するもので、野火のように拡がる。それは、またたくまに社会全体をなめつくし、暴力、事変、破局、あるいは大勝利などのデマをふくんでいる。

③のデマは、『潜在的なデマ』で、それは一時ひろがって、それから水にくぐったように影をひそめ、また機会を得てふたたびひろがるデマである。

デマの分類の第二は、主題によつて分析するもので、この場合、研究者は、特定のトピックスについてのデマの数を、ただ数えあげる。

平時では、たとえば、政治、国際関係、少数民族などについての、数の比例を調べる。

デマの分類の第三は、心理学的な分析で、デマのうちに反映される「動機、緊張の主なタイプ」が、それである。しかもこうしたデマは、少しも学問（Wissenschaft）を尊敬せず、冷静な科学でさえ、歪曲と誤りを冒すことは、アメリカの G・G・Simpson（シンプソン）博士が、残念ながら発見したことである。

このようにして、軽信性は、政治社会において、①ポスターおよび図解による方法、②宣伝文書、③ラジオ番組、④テレビ番組、⑤演説、⑥講演、⑦著書、雑誌、新聞、公報、特別読物、⑧映画、⑨日常の会話、手紙、電話、電報、⑩その他、といったマス・メディアによって拡散していくのである。（二十五）

## 六、政治社会にみる「軽信性」の克服

それでは、以上論述してきたような政治社会にみる軽信性は、どのようにして克服できるであろうか。

政治社会において、軽信性におちいり易いかどうかは、大きな個人差があることに着眼しなければならない。

例えば、人種的な偏見がもつとも強いところ（アメリカ）でも、すべてのアメリカ人が黒人攻撃の噂を信ずるわけではないし、どんな村にでも、その土地の噂はなしにのらない人たちがいる。

すなわち、あいまいさと、重要さの条件が強いところでも軽信性の環になるのは、「暗示」されやすいひとびとの

間にだけである。

そして、ここで暗示されやすいというのは、論理的に要求される証拠がないにもかかわらず、ある事象を承認することである。

ところが、あるひとびとは、聞いたり、見たり、読んだりすることを、すべて批判的に吟味するくせがついている。意味論、社会心理学等の訓練がある人、あるいは、その他の理由で、ものをたやすく信じないひとびとは、確かな証拠は、諺にあるミズリーの人のように、待つのである。（二十〇）

これに対して、軽信性におち入りやすい人は、その精神生活が貧弱であるか、あるいは先入主や複合によって、型にはまりすぎているのである。

したがって、政治社会にみる「軽信性」の克服は、正しい政治教育や学問の普及等によって、こうした精神生活の貧弱さをなくし、理性的判断をくだす訓練と、そのための場を与えることにあるといえるのである。

とりわけ政治は、多くの人がはげしい感情をまじえることがらなので、選挙の際の、候補者についてのささやき戦術などは、平然と行なわれのが常である。

候補者がはげしく嫌われていれはいるほど、彼の動機、過去の生活、私生活のふしだら、野望などを、ひとびとの軽信性に訴えて、ますますはげしく攻撃するのである。

実際、アメリカ大統領選挙は、アメリカの政治の歴史の始めから、ささやき戦術で汚されて来た。

この戦術の犠牲者は、ジャクソンとか、ハーディングとかであった。

更に、ジェフアスは、無神経と不道德のそしりを受け、ガーフィールドは、離婚まぎわであるといわれ、アーサーは、ワシントンの社交界夫人と姦通しているとまで非難されたのである。(二十七)

このようにして、事実というレッテルをはられたニューズは、一番信用されやすく、一方、デマとしてかかげられたニューズは、一番信用されないといった現象を、政治社会では発見できるのである。

しかもこうした軽信性のばい菌は、政治社会という生体の中で、つねに生きている。

時にはそれは、ゆるやかに動いているし、時には激しい活動によって爆発する。

そしてその熱は、不幸にして、政治社会という生体の健康が一番その抵抗力を失っているときに、はげしく爆発するのである。

しかもこのような現象は、普通の健康な人にも、強い恐怖の状態では、充分起りうるのである。

かくして、軽信性の鎖は、その鎖を作っている各個人の「暗示性」に比例し、「興奮」が大きいほど、ひとびとは、その鎖にまき込まれやすい。

すなわち、戦争、暴動、選挙といった場合には、ことさらそうで、ずるいデマのひろめ手を生みやすく、軽信性を克服するためには、どうしても、こうしたデマに注意する能力をつけるとともに、その努力を注入することが、必要になってくるのである。

しかるが故に、政治社会の中であって、ひとびとは、事理に通じ、公正な判断と良識をそなえておらなければならず、そのためには、ひとびとは、デマの心理学について、若干の知識をそなえていなければならないといえよう。

そして、そうした知識をひとびとに授け得る「有能で積極的な人物」も、必要になってくることはいうまでもないのである。

政治社会の中にあつて、盲点や偏見にわずらわされぬだけの能力は、技術的には、ひとり政治学や行政学や公法学にとどまらず、社会心理学や異常心理学などの心理学や精神病理学の基礎が必要とされるといえるのである。

しこうして、軽信性克服のため、これの「撃退のねらい」<sup>(二十八)</sup>は、次の点に留意することが必要であるといえるのである。

- 1、思慮深い人を養成すること。
- 2、政治社会において、軽信性をもたらずデマを発することは、敵側の宣伝の餌になることを知らせること。
- 3、政治社会において、軽信性をもたらずデマは、長期的には志気をうち砕き、それをひろめるのは、結果的には、非愛国的で、恥ずべきことであることを知らせること。
- 4、政治社会において軽信性をもたらずデマをひろめる人は、愚かな、悪意のある、危険な人物であることを知らせること。

## 七、むすび

以上、私は、「政治社会にみる「軽信性」」(“Gullibility” in Political Society)について、論述してきたが、このことは、政治学をして、「軽信性による政治」(Gullibility の政治)の政治ⅡGの政治)から、「理性による政治」(Reason の

政治ⅡRの政治Ⅰを確立するための学問たらしめる必要性を、提言したかったがためにほかならない。

すなわち、

$G \vee R \downarrow G \wedge R \text{ or } G \cdot R$

の提唱である。

今日まで、政治は、「支配」する概念として考えられ、またこれに「抵抗」する概念として考えられて来たが、今や政治は、利害・関心の合理的理性の操作による、「相互調整」の概念として考える必要にせまられている。

そのため、とりわけ政治社会の中にあつて、政治家には、合理的な手段によつて、ひとびとの意見を開発し、くみあげ、適切な「まとめ」を与える能力（とくにそのための洞察力または目測<sup>（二十九）</sup>）が、重要な課題となつてきている、といえるのである。

すなわち、政治に関係するすべてのひとびとは、これからは、「対立」・「敵対」・「闘争」を合理的理性に訴えつつ、これを賢明に克服して、「共存」・「連帯」・「協力」をいかにして確立する<sup>（三十）</sup>かの実践を迫られているのである。

要するに、現代政治社会である大衆民主主義社会にあつては、本来、人間の本性にもとずくところの「対立抗争」の克服を、あらゆる努力を払つてなし、「共存協力」による政治社会を建設することを要請されているのである。

しかればこそ、今後の政治社会にあつては、「感情的非合理的行為」に訴える「軽信性」の政治Ⅱは、克服され、「理性」の政治Ⅰが確立されねばならない、といえるのである。

## 【註】

- (一) Edward Hallett Carr: The New Society—IV. From Individualism to Mass Democracy—p. 69.
- (二) Francis Bacon: Bacon's Essays—Compiled With Notes By Y. Nitsu—p. 17.
- Bacon's Essays—XVII Of Superstition—The causes of superstition are, pleasing and sensual rites and ceremonies; excess of outward and pharisaical holiness; the stratagems of prelates for their own ambition and lucre; barbarous times, especially joined with calamities and disasters.
- (三) Edward Hallett Carr: *ibid.*, p. 69.
- (四) Edward Hallett Carr, *ibid.*, p. 69, p. 73.
- (五) Francis Bacon: *ibid.*, p. 38.
- Bacon's Essays—XXXXXIII Of Praise—There be so many false points of praise, that a man may justly hold it a suspect.
- (六) 内田繁隆著「政治学序説」 五二頁。
- (七) 丸山真男著「日本の思想」 一二七頁。
- 「化けもの」と関連して、政治と「被暗示状態」(suggestibility)については、原田鋼著「政治学原論」一八五—一九二頁、超越的支配と「盲目的服従」(obéissance aveugle)については、原田鋼著「前掲書」一六九—一七二頁、参照。
- (八) 丸山真男著「前掲書」 一二九頁、一四一頁。
- (九) 丸山真男著「前掲書」 一三九頁。
- (十) 中根千枝著「タテ社会の人間関係—単一社会の理論—」 三〇頁、三一頁、四九頁。
- 祖父江孝男、我妻洋共著「国民の心理」 六八頁、六九頁。
- (十一) 中根千枝著「前掲書」 五五頁。
- (十二) 中根千枝著「前掲書」 一一五頁、一一六頁、一一八頁等から構成した。
- 渡辺洋三著「法というものの考え方」 一七頁、参照。



- (十三) 藤原弘達著「官僚」 一二四頁、一二五頁。
- (十四) 今中次麿著「政治社会発展の理論」 一〇九、二〇四頁。
- (十五) 今中次麿著「前掲書」 二〇九頁。
- ほかに、政治的革命の原因については、内田繁隆著「政治学新原理」一七四頁～一七七頁、参照。
- (十六) 今中次麿著「前掲書」 一四〇頁～一四二頁。
- (十七) 大塚久雄著「社会科学の方法」一五四～一五五頁。
- (十八) G. W. Allport and L. Postman: The Psychology of Rumor, p. 1, p. 25.
- (十九) The Boston Sunday Herald, 1943. 7. 18.
- (二十) オルポート、ポストマン共著、南博訳「デマの心理学」―「第二章デマはなぜ流れるか」四十一頁～四十二頁、参照。
- (二十一) オルポート、ポストマン共著、南博訳「前掲書」九〇頁、九八頁、九九頁、一〇三頁、一〇六頁、一一〇頁、一六〇頁、一六一頁、参照。
- (二十二) T. Chadwick: The Influence of Rumor on Human Thought and Action, 1932.
- (二十三) V. Stefansson: The Standardization of Error, 1928.
- 飯坂良明「政治学―Ⅵ、群集・モブ」二五頁～二九頁。F・ノイマンは、逆行的大衆運動にみる善玉、悪玉式判断を、「誤った具体性」と呼び、大衆運動の特徴的メンタリティとしている。
- しかも、この「誤った具体性」は、いささかの真実性を含んでいるゆえに、かえって強力な真実性の仮面を呈する。
- (二十四) オルポート、ポストマン共著、南博訳「前掲書」一九七頁～二〇一頁。
- (二十五) 例えば、新聞にみる見出しと記事の食い違いは、珍らしいことではない、見出しはデマと同様に、編集者や指導者の偏見をあらわし、記事は、一定の形式にしたがって比較的眞実に近い内容で編集者、あるいは、指導者を守っているのである。
- この場合、見出ししか読まないひとびとは、明らかに「軽信性の俘虜(とりこ)」となるのである。
- (二十六) オルポート、ポストマン共著、南博訳「前掲書」 二〇九頁。

- (二十七) オルポート、ボストマン共著、南博訳「前掲書」 二二三頁、二二四頁。
- (二十八) G. W. Allport and L. Postman, *ibid.*, "Appendex".
- (二十九) マックス・ヴェーバー著、西島芳二訳「職業としての政治」 七七頁。  
南原繁著「現代の政治と思想」 一一三頁。
- (三十) Léon Duguit: *Traité de Droit Constitutionnel*, tom. 11, p. 54.
- E. Durkheim: *De la Division du Travail Social*, p. 79—.
- F. Tönnies: *Einführung in die Soziologie*, S. 5.
- E. E. Schattschneider: "Intensity, Visibility, Direction and Scope-the American Political Science Review, December, 1957.
- 内田繁隆著「政治学新原理」序文五頁、本文四三頁、四五頁、五二頁、七三頁、等参照。